

地蔵寺遺跡

地蔵寺東方遺跡

2000年3月

河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、市域を高野街道を初めとする街道が通り、南河内における交通の要衝として発展してきた街です。このため、市内には金剛寺、觀心寺などの寺社に代表される重要文化財や、多くの埋蔵文化財が残されています。

このような河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、近年になって住宅都市として急速に開発が進んでいます。

開発がもたらす影響は自然や文化財にとって大きなものです。とくに埋蔵文化財にとっては直接的に関わってくるものとして大きな問題であります。

開発を必要とすると同時に、失われていく遺跡に託された先人達のメッセージを現在の市民、さらには未来の市民へと伝えていかなければなりません。

本書は河内長野市に存在する遺跡の発掘調査の成果を収録しています。先人達が残したメッセージの一部でも理解していただければ幸いです。

発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深い御理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成12年3月

河内長野市遺跡調査会
理事長 福田弘行

例　　言

1. 本報告書は平成11年度に河内長野市遺跡調査会が大阪府南河内農と緑の総合事務所から委託を受けた地蔵寺遺跡及び地蔵寺東方遺跡の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、大阪府が負担した。
2. 試掘調査に関しては河内長野市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦が担当した。本調査は尾谷・同課文化財保護係鳥羽正剛・同係太田宏明を担当者として実施した。内業調査は河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子が補佐した。
3. 調査にかかる事務は河内長野市遺跡調査会事務局長大塚幸男（本市教育委員会教育部社会教育課課長補佐）が主担した。
4. 本書の執筆・編集は太田が行い、編集は松尾和代がこれを補佐した。文責については太田が負責ものである。
5. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。（敬称略）
大塚幸男・菊井佳弥・喜多順子・杉本祐子・田川富子・中尾智行（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）・中里伸明・中村幸子・野田陽子・藤原哲（ふれあい考古館館員）・華井京子・柄本裕子・牟田口京子
6. 発掘調査については下記の方々の協力を得た。記して感謝する。（敬称略・順不同）
株式会社島田組・写測エンジニアリング株式会社・宗教法人地蔵寺・上岩瀬自治会・下岩瀬地区・清水自治会・東邦治・中村司・大北義明
7. 写真撮影は、遺構については太田、遺物については中西が行った。
8. 本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管されており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1. 本報告書に記載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色は『新版標準土色帖』による。
3. 平面測量は国土地理院第VI系による5mメッシュを基準に実施した。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。
S B…礎石建物 S D…暗渠・溝 S K…土坑 S P…柱穴 S R…土壤墓
S W…石列・石垣
6. 遺構実測図の縮尺は、1/30・1/40・1/50・1/60・1/80・1/100・1/120・1/125である。
7. 遺物実測図の縮尺は、石器2/3・土器1/4・瓦1/4・鉄製品1/2とした。
8. 瓦器・陶磁器の断面は黒塗り、石器の断面は白抜き、瓦・鉄製品の断面は斜線である。
9. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。
10. 文中の瓦器場は尾上実氏の和泉型瓦器場の編年、白磁の型式分類は森田勉氏の編年に基づくものである。なお、器種名については本調査会の表記によるものとする。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 位置と環境.....	1
第2節 調査に至る経緯.....	1
第3節 調査の方法.....	5
第4節 調査の概要.....	5
第2章 調査の結果.....	7
第1節 地蔵寺遺跡.....	7
1 第1調査区.....	7
2 第2調査区.....	12
3 第3調査区.....	14
第2節 地蔵寺東方遺跡.....	15
第3章 まとめ.....	23

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 河内長野市遺跡分布図(1/40000).....	2
第3図 調査区位置図(1/5000)	4
地蔵寺遺跡	
第4図 第1調査区土層断面実測図(1/60)	7
第5図 第1調査区遺構配置図(1/125).....	8
第6図 S B 1 遺構実測図(1/60)	8
第7図 S D 1 遺構実測図(1/30)	9
第8図 S D 2 + S P 1 遺構実測図(1/30・1/60)	10
第9図 S W 1 遺構実測図(1/50)	10
第10図 S W 2 遺構実測図(1/60)	11
第11図 第1調査区包含層出土遺物実測図.....	12
第12図 第2調査区遺構配置図(1/100).....	12
第13図 第2調査区土層断面実測図(1/50)	13
第14図 S K 1 + 2 遺構断面実測図(1/50)	13
第15図 第2調査区包含層出土遺物実測図.....	14
地蔵寺東方遺跡	
第16図 S D 1 遺構実測図(1/80・1/40)	15
第17図 調査区地形図(1/300).....	16
第18図 S K 1 ~ 3 遺構断面実測図(1/40)	17
第19図 S K 4 + 5 遺構実測図(1/40)	17
第20図 S R 1 遺構実測図(1/40)	18
第21図 S R 2 遺構実測図(1/40)	19
第22図 S R 3 遺構実測図(1/40)	19
第23図 S K 10 出土遺物実測図.....	20
第24図 包含層出土遺物実測図.....	20
第25図 遺構配置図(1/120) 及び土層断面実測図(1/80).....	21~22

表 目 次

第1表 河内長野市遺跡地名表.....	3
---------------------	---

図版目次

- 図版1 遺構 地蔵寺遺跡・地蔵寺東方遺跡 調査地遠景（上空から）
図版2 遺構 地蔵寺遺跡 第1調査区全景(東から)、第1調査区全景(西から)
図版3 遺構 地蔵寺遺跡 S B 1（北から）、S B 1（南から）
図版4 遺構 地蔵寺遺跡 S B 1・S D 1(北から)、S B 1・S W 1(東から)
図版5 遺構 地蔵寺遺跡 S W 2（東から）、S W 2裏込土中の木組み遺構（東から）
図版6 遺構 地蔵寺遺跡 第2調査区全景（西から）、第3調査区全景（北から）
図版7 遺構 地蔵寺東方遺跡 調査区遠景（上空から）
図版8 遺構 地蔵寺東方遺跡 調査区全景（上空から）
図版9 遺構 地蔵寺東方遺跡 調査区全景（南から）、調査区北半部（南から）
図版10 遺構 地蔵寺東方遺跡 S R 1 検出状況(西から)、S R 1 完掘状況(西から)
図版11 遺構 地蔵寺東方遺跡 S R 2 検出状況(西から)、S R 2 完掘状況(西から)
図版12 遺構 地蔵寺東方遺跡 S R 3 完掘状況(北から)、S R 3 遺物出土状況(北から)
図版13 遺構 地蔵寺東方遺跡 調査区北部トレンチ全景（北から）
図版14 遺物 地蔵寺遺跡 第1調査区包含層（1～3）、第2調査区包含層（8・9）
地蔵寺東方遺跡 S K10 (10)、包含層 (12)

第1章 はじめに

第1節 位置と環境

地蔵寺遺跡及び地蔵寺東方遺跡は、河内長野市南部の天見地区に所在する。当該遺跡の周辺は和歌山県との県境、紀見峠付近を源流とし、北に流れる天見川が形成した谷地形をなしている。遺跡は天見川西岸にある尾根の先端に位置する。

当該遺跡の東方にあたる天見川の対岸には、中世の寺院跡と考えられる千早口駅南遺跡が立地している。千早口駅南遺跡は平成2年度に発掘調査が行われており、主に13世紀中頃から15世紀初頭にかけての遺構・遺物が出土した。出土遺物には一般の集落跡からは出土例が乏しい青磁・白磁などが見られ、仏具と考えられる遺物が出土していることから、谷を隔てて南側に位置する薬師寺との関連が説かれている。またさらに東方の標高547mの旗尾山の山頂に中世の山城と考えられる旗尾城跡が立地している。

遺跡の北には岩瀬薬師寺遺跡、清水遺跡が位置している。岩瀬薬師寺には歴応4年銘の五輪塔がある。清水遺跡は中世の遺物が散布することが知られている。南は高野街道沿いに遺跡が点在しており、天見駅北方遺跡、小野塚遺跡、蟹井淵北遺跡、蟹井淵神社遺跡、蟹井淵南遺跡がある。これらは何れも中世以降に形成された遺跡であり、高野街道と密接なつながりを有するものであろう。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査に至る経緯

当該発掘調査は、大阪府南河内農と緑の総合事務所（以下、事務所という）を事業主とするふるさと農道（以下、農道という）建設事業に先立つ事前調査である。平成8年2月26日に河内長野市清水地区の農道の文化財に関する取扱について、大阪府農林部耕地課（以下、耕地課という）・大阪府教育委員会文化財保護課（以下、府教委とい）・河内長野市教育委員会（以下、市教委とい）の三者で協議を行った。

この結果、①府指定名勝の地蔵寺の景観に影響を及ぼすこと、②国道371号から地蔵寺までの路線は埋蔵文化財を包蔵する可能性があること、③石川の上流域にはオオサンショウウオの生息の可能性があることが問題点として提示され、①に関しては府教委と耕地課



第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)

番号	遺跡名	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳（前期）	
5	大師山南古墳	古墳（後期）	
6	大師山遺跡	集落・生產	発生（後期）・平安
7	奥禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	鳥居子形古墳遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池遺跡群	生產	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生產	平安～中世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
17	岩瀬寺遺跡	社寺	平安以降
18	正ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	臼石器～中世
20	鳥居子形城跡	城跡	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	纏文・古墳～中世
22	鳥居子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯	窯	生產
24	塙谷遺跡	散布地	纏文～中世
25	諏訪八幡神社遺跡	社寺	平安以降
26	蟹井洲南遺跡	散布地	中世
27	蟹井洲北遺跡	散布地	中世
28	天貝堅北遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬崇御寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	丘ノ神宮前古墳	古墳？	
33	草村地藏堂遺跡	社寺	近世
34	庵頭埋蔵遺跡	古墳	近世
35	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
36	東の村觀音堂跡	社寺	近世
37	西の村觀音堂跡	社寺	近世
38	廣水阿彌陀堂跡	社寺	近世
39	鷹尾寺跡	社寺	近世
40	宮の下内古墳	古墳	古墳
41	高山古墳	古墳	古墳
42	宮山古墳	古墳	古墳
43	西代藩陣屋跡	散布地・城館	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町島地	古墳	近世
45	物持寺跡	散布地・社寺	纏文・奈良・鎌倉
46	豪山遺跡	散布地	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	纏文
48	上原遺跡	散布地	臼石器～近世
49	佐久神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所落合官所跡	城跡	江戸
53	双子塚古墳	古墳	
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	纏文～近世
55	河合寺城跡	城跡	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	臼石器～近世
57	日の谷跡	城跡	中世
58	高木遺跡	散布地	纏文
59	沙の山城跡	城跡	中世
60	峰山城跡	城跡	中世
61	福井山城跡	城跡	中世
62	圓見城跡	城跡	中世
63	旗蔵城跡	城跡	中世
64	権現城跡	城跡	中世
65	天神社遺跡	社寺	中世以降
66	葛城第15經塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	唐中堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城跡	中世
70	佐近城跡	城跡	中世
71	鹿原城跡	城跡	中世
72	葛城第16經塚	経塚	平安以降
73	葛城第18經塚	経塚	中世
74	葛城第19經塚	経塚	平安以降
75	葛城第20經塚	経塚	中世
76	大沢塞	城館	中世
77	三国山塚	経塚	平安以降
78	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
79	猿子塚	経塚	中世
80	蟹井祖神社遺跡	社寺	中世以降
81	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	十代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生產	纏文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	古墳・遺跡	弥生～中世
87	高向南遺跡	散布地	縄文
88	小原遺跡	集落	纏文～中世
89	御壁遺跡	集落	古墳（後期）
90	猪崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	羽立城跡	城跡	中世
95	上原近井瓦窯	生產	近世
96	市東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町遺跡	牛舎	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
105	葛城第17經塚	経塚	平安以降
106	栗原堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	牛舎	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	奈良・中世
109	堀原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳	古墳	古墳
111	山上藤山古墳跡	古墳	古墳
112	西御遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	鏡町東遺跡	散布地	中世
117	大井遺跡	散布地	纏文・中世
118	鈴町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	牛舎	纏文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生
122	桶町遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神方丘近世墓	墳墓	近世
126	壇掃寺遺跡	社寺	中世以降
127	三味城遺跡	墳墓・城館	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	縄文
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかし台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

第1表 河内長野市遺跡地名表

で協議を行い、②については市教委と事務所で協議を行い試掘調査を実施することで合意に達した。

その後、①に関しては、農道予定地が府指定名勝地蔵寺の範囲の一部を含むことが分かり、同年3月6日に府教委、耕地課及び市教委で現地にて協議が行われた。この結果、府教委による許認可は不可能で文化財審議会にはかる必要がある旨が府教委から耕地課へ伝えられた。その後、審議会の許可が同年10月20日におりた。同年4月2日には事務所と市教委で②について協議があり、同年10月17日に事務所は河内長野市遺跡調査会（以下、調査会という）へ試掘調査を委託した。試掘調査は平成9年2月17日から同年3月14日まで行われ、中世墳墓と思われる遺構と遺物を検出した。この結果を受けて、市教委は「地蔵寺東方遺跡」と命名し、文化財保護法57条の6に基づく遺跡新規発見の通知を大阪府を経由して文化庁に行った。また地蔵寺遺跡・地蔵寺東方遺跡共に工事施工に先立つ事前調査が必要であるという結論に達した。

平成11年2月18日には、市教委と事務所が覚書を締結し、それに基づき、市教委の指導の下、地蔵寺遺跡・地蔵寺東方遺跡共に、事務所と調査会が委託契約を締結した。契約にかかる外業調査（発掘調査）については平成11年4月20日から同年5月21日かけて行った。

内業調査については平成11年11月16日に事務所と調査会が委託契約を締結し、同年11月17日から平成12年3月21日にかけて実施し、すべての委託業務を完了した。



第3図 調査区位置図 (1/5000)

第3節 調査の方法

当該発掘調査は、試掘・確認調査とそれを受け実施した本調査に分かれている。

地蔵寺遺跡

地蔵寺遺跡の本調査では調査区を3カ所設定した。調査区の名称は掘削を進めた順に第1調査区・第2調査区・第3調査区とした。掘削はすべて人力で行った。第1調査区は幅約6m、長さ約20mで、深さ0.5~1mで近世・近代の遺物・遺構面を検出した。第2調査区は幅6m、長さ8mで、深さ0.3mで近世・近代の遺物・遺構面を検出した。第3調査区は幅1m、長さ3mで、遺構の有無の確認を目的として設定したが、遺構・遺物ともに検出できなかった。

地蔵寺東方遺跡

試掘調査では国道371号の西に接する尾根上に第1調査坑から第5調査坑まで設定した。この結果、遺構面が深さ0.5mで検出され、遺構からは中世の遺物が出土した。

本調査では幅10m、長さ37mの調査区を設定して尾根上に限って面的な調査を行った。掘削はすべて人力で行い、遺構面は深さ0.5~1mで検出できた。調査を行った結果、弥生時代、近世の遺物が包含層から出土し、試掘調査で検出した中世の遺物は出土しなかった。遺構に関しては、柱穴、土坑、溝等が検出できたが、遺構に伴う遺物は検出されなかつた。しかし、検出した遺構は試掘調査の時点で確認した遺構面と同一面上に存在していることから中世のものと考えた。

第4節 調査の概要

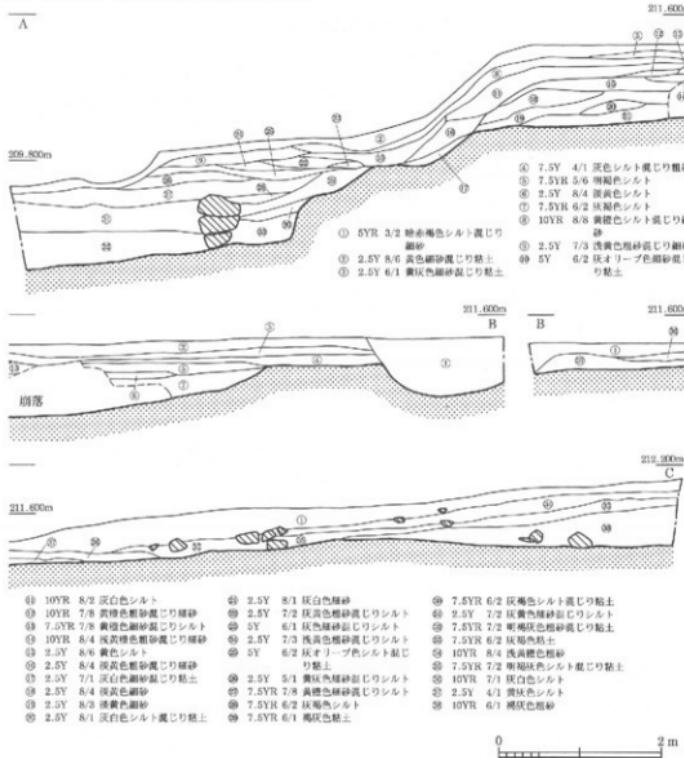
発掘調査を行った地蔵寺遺跡・地蔵寺東方遺跡は市内南部を流れる天見川の西岸に位置している。このうち地蔵寺遺跡は加賀田地区へ通じる谷筋に合計3カ所の調査区を設けた。このうち2カ所から近世のものと考えられる遺構を検出した。特に第1調査区からは近世の建物跡と共に付随すると考えられる暗渠や石列・石垣等を検出している。地蔵寺東方遺跡の調査においては国道371号に平行して南北にのびる標高220mから235mにかけての尾根上に調査区を設定し、中世墓を検出した。また包含層から弥生時代の扁平片刃石斧が出土した点は注目される。

第2章 調査の結果

第1節 地蔵寺遺跡

1 第1調査区

第1調査区は、長辺17m、短辺6~10mで設定し、遺構面は西半部と東半部では約1.5mの比高差が認められた。西半部を盛土により造成しており、造成部分の東端に石垣を築いて土留めとしているようである。検出した遺構は、礎石建物、石列、暗渠、石垣等であった。各遺構から遺物は出土しなかった。



第4図 第1調査区土層断面実測図 (1/60)



第5図 第1調査区遺構配置図 (1/125)

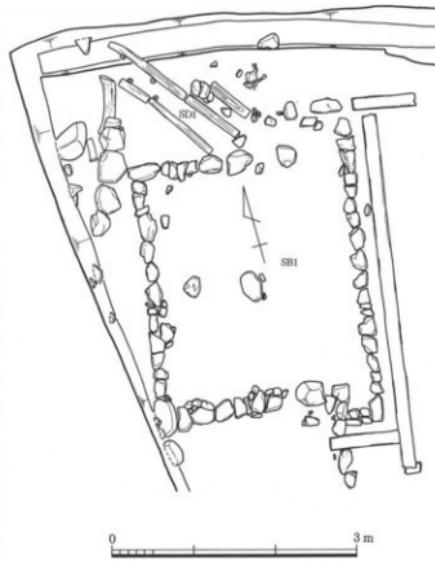
(1) 磐石建物

[SB1] (第6図、図版3・4)

SB1は調査区の西端で検出された。やや南北に長い長方形を呈しており、長辺3.2m、短辺2.8mを測る。主軸方向はN-9°-Eを示す。

建物の基礎には地覆石を巡らせている。地覆石には20~30cmの扁平な石材が主に使用されている。地覆石は北辺と南辺の並び方に特徴があり、北辺は東側を外部に、西側を内部に食い違えている。また、この部分はSD1に接続していることから排水施設に関連する構造であると考える。南辺も東端部が0.7m幅で0.3m程度突出している。

この部位はSW1に接続している。後述するようにSW1は道もしくは増築の際に設置された基礎の可能性がある。SB1のほぼ中央では地覆石と同様の石材を1石検出している。これは、礎石と考えられ、この部分で柱を受けていたようである。地覆石の東ではこれに沿って角材状の石材を検出している。



第6図 SB1 遺構実測図 (1/60)

このSB1の北西からも、地覆石と考えられる石列を検出している。この遺構は隅角部分に限って検出している。先述のSB1とはやや主軸を異にしているようであり、北辺において2個体、東辺において4個体の石材を検出している。

(2) 暗渠・溝

[SD1] (第7図、図版4)

SD1はSB1の北側で検出している。幅0.4m、深さ0.2mの堀形を穿っており、長さ約2mにわたって検出した。堀形内には、掘形の両側面に沿わせてそれぞれ木材を設置している。木材は幅約10cmのものが使用されており、合計4本を検出した。堀形内の底部や肩部はグライド化していた。SD1はSB1に伴う排水のために使用された暗渠であると考える。

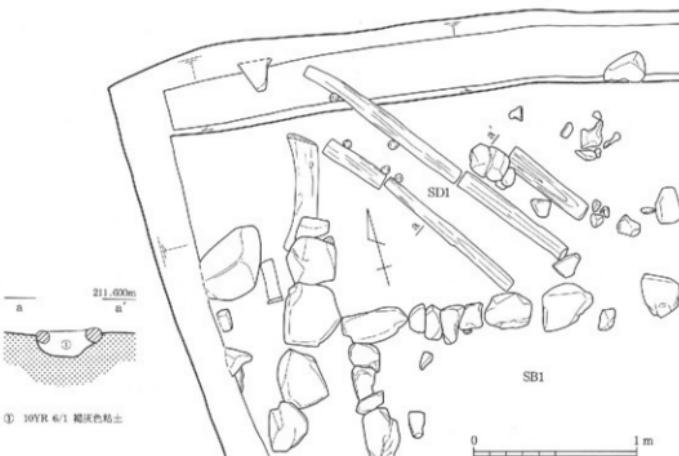
[SD2] (第8図)

SD2は調査区東半部に位置し、SW2が埋没した後に穿たれていた。SD2はコの字形の平面形を呈し、幅約0.2m、深さ約0.1m、長さ約2.7mにわたって検出した。

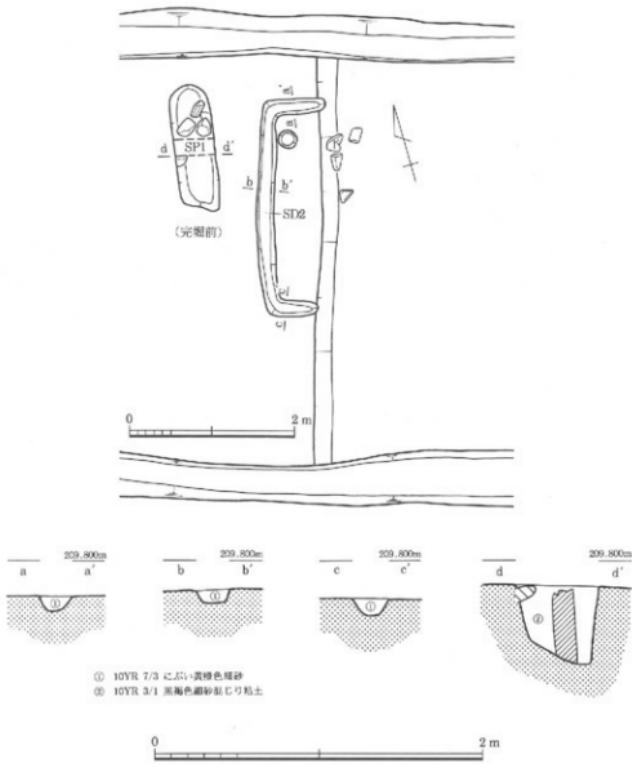
(3) 柱穴

[SP1] (第8図)

SP1はSD2と同一面において穿たれており、SD2の西約0.5mに位置する。SP1は梢円形を呈しており、長径1.5m、短径0.4m、深さ0.5mであった。SP1の堀形内には柱根が遺存していた。堀形内で検出した柱根は、下層の遺構と共に図示した。



第7図 SD1 遺構実測図 (1/30)



第8図 SD2・SP1遺構実測図 (1/30・1/60)

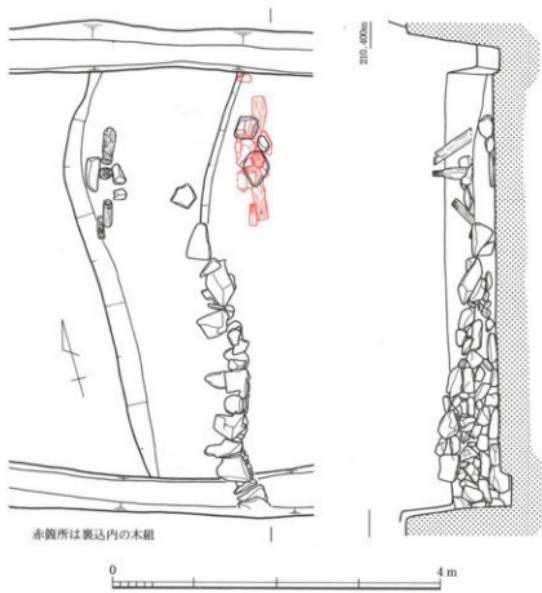
(4) 石列・石垣

[SW1] (第9図、図版4)

SW1はSB1の南東側で検出している。SW1は6.5mにわたって検出できた。10~20cmの扁平な石材が用いられており、下半部が埋置されていた。埋置に際しては幅0.6m、深さ0.3m程度の堀形を穿っていた。堀形の埋土は堅くしめられた10YR6/1褐灰色粘土1層によって埋められていた。SW1は通路もしくは基礎の可能性がある。



第9図 SW1遺構実測図 (1/50)



第10図 SW 2 遺構実測図 (1/60)

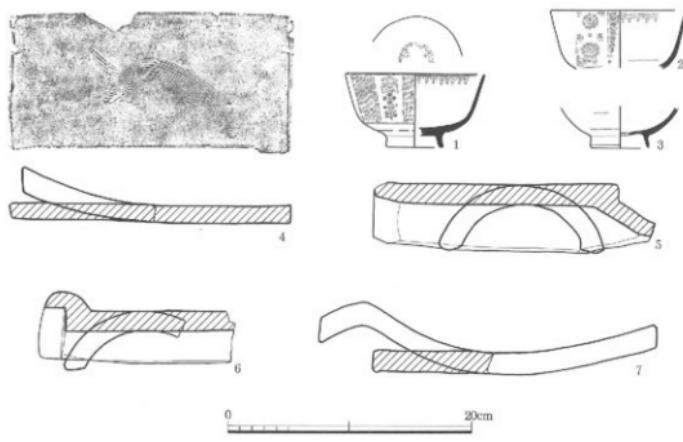
〔SW 2〕（第10図、図版5）

SW 2は調査区の東半部で検出した。SW 2は長さ4.8mにわたって検出しており、最も遺存状況が良好であった箇所で高さ0.8m、5段の石積が遺存していたが、1～2段程度しか遺存していないかった箇所もあった。SW 2は北方向へさらに続いていたと考えられるが、石材の崩落により北半部は遺存していないかった。また調査区の南壁にも石材が露出していることから、調査区の南側へも延びるものと想定する。

SW 2は幅1.4mの堀形を伴っており、堀形は下から②7.5Y R6/2灰褐色粘土、③7.5Y R6/2灰褐色シルト混じり粘土、④7.5Y R6/1褐色粘土、⑤7.5Y R6/2灰褐色シルト（第4図）で埋められており、これらは堅くしまっていた。控積は見られなかった。石材が崩落していた北半部の堀形内には木組みが見られ、木組みは、横方向に1本の木材を寝かせ置き、これを縦方向に打ち込んだ木杭で留める構造であった。また、石垣の西側に図示している4本の柱根は、上層の遺構に伴うものである。

（5）包含層

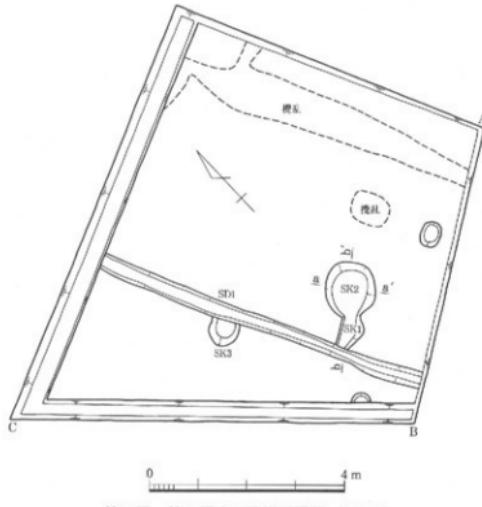
第1調査区からは遺構に伴う遺物は出土しなかったが、包含層から瀬戸の碗（1～3）、熨斗瓦（4）、丸瓦（5）、冠瓦（6）、棟瓦（7）が出土している。（第11図、図版14）



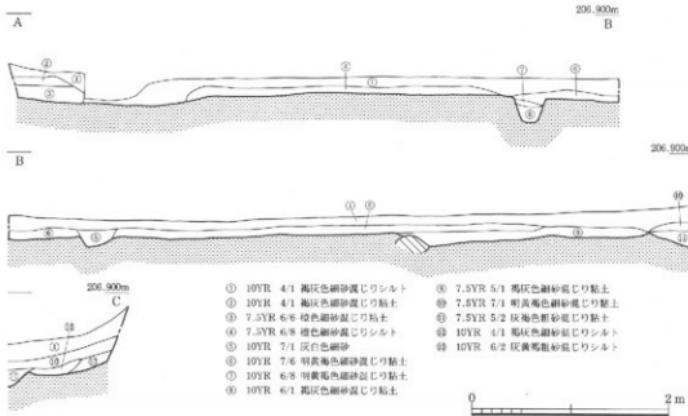
第11図 第1調査区包含層出土遺物実測図

2 第2調査区

第2調査区は、長辺9m、短辺6.3mの台形をしており、検出面はほぼ平坦である。遺構は基盤層上面で検出した。検出した遺構は、溝、土坑であり、遺構から遺物は出土しなかった。



第12図 第2調査区遺構配置図 (1/100)



(1) 溝

〔S D 1〕 (第12図)

S D 1は調査区の西半部をほぼ直線的に南北に走っており、検出した長さ6.96m、幅0.22~0.36m、深さ0.18mを測った。溝は下から、⑧10Y R6/1褐灰色細砂混じり粘土、⑦10Y R6/8明黄褐色細砂混じり粘土で埋没していた。S D 1は耕作地に伴う施設と見られる。

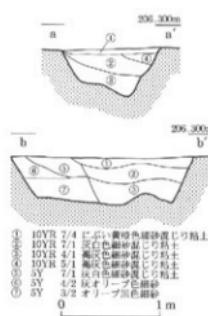
(2) 土坑

〔S K 1〕 (第12・14図)

S K 1は、S D 1の東側で検出している。S D 1とS K 2に切られているが、残存部の長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.4mを測った。S K 1は下から⑦5Y 3/2オリーブ黒色細砂、⑥5Y 4/2灰オリーブ色細砂、⑤5Y 7/1灰白色細砂混じり粘土の3層で埋没していた。

〔S K 2〕 (第12・14図)

S K 2は、S K 1の東側に位置する。平面形は橢円形を呈し、長径1.2m、短径1.0m、深さ0.5mを測った。S K 2は下から⑩10Y R4/1褐灰色細砂混じり粘土、⑨10Y R7/1灰白色細砂混じり粘土、⑧10Y R5/1褐灰色細砂混じり粘土、⑪10Y R7/4にぶい黄橙色細砂混じり粘土の4層で埋没していた。



第14図 S K 1・2 遺構断面実測図 (1/50)

[SK 3] (第12図)

SK 3は、SD 1の西側に位置し、SD 1によって東半部を切られている。残存部の長軸0.62m、短軸0.54m、深さ0.07mを測った。SK 3は10Y R7/4にぶい黄橙色細砂混じり粘土1層で埋没していた。



8

(3) その他の遺構

第2調査区では、これらの遺構以外に調査区の南辺に沿って2カ所の柱穴を検出している。

(4) 包含層

遺構に伴う遺物は出土しなかったが、包含層から瀬戸の小壺(8)・皿(9)が出土した。(第15図、図版14)



9

0 10cm

3 第3調査区

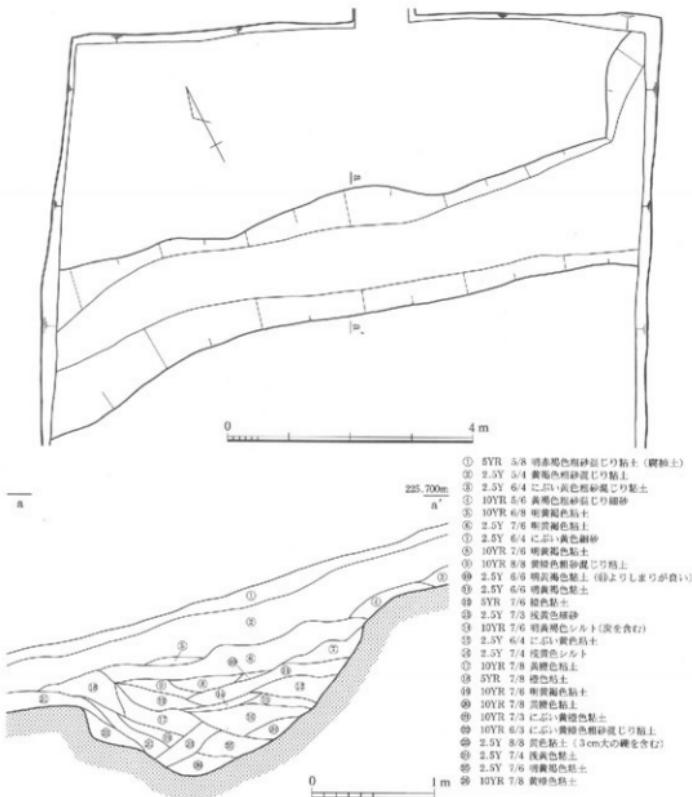
第15図 第2調査区
包含層出土遺物実測図

第3調査区は遺構の有無を確認するために、河川沿いに長辺3.2m、短辺1mで設定した。深さ0.4mで基盤層を検出し、基盤層上には下から10Y R4/1褐色細砂混じりシルト、10Y R7/6明黄褐色細砂混じり粘土、7.5Y R6/8橙色細砂混じりシルトが堆積していた。遺構・遺物は検出されなかった。

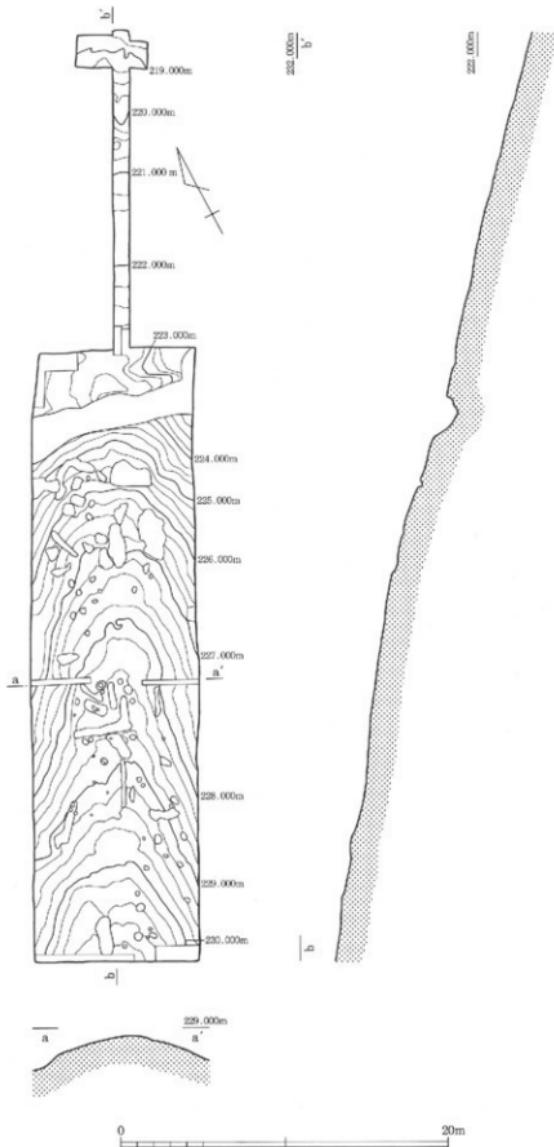
第2節 地蔵寺東方遺跡

尾根の稜線上に幅10m、長さ37mの調査区を設定した。調査区の断面は南壁・西壁及び調査区中央に十字に設定した畦で観察した。また、調査区の北では稜線上に幅1mのトレンチを長さ20mにわたって設定し、トレンチの北端で石列を検出したことからトレンチ北端を東西4m、南北2m拡張した。

検出した遺構は溝、土坑、柱穴である。検出した土坑の中には土塙墓と考えられるものが含まれている。SK10からは瓦器塊と鉄製品が出土しているが、その他の遺構からは遺物は出土しなかった。なお、SK10は試掘の際に調査を行った。



第16図 SD 1 遺構実測図 (1/80・1/40)



第17図 調査区地形図 (1/300)

(1) 溝

[SD 1] (第16図)

SD 1は調査区の北端で検出している。幅1.6~2.6m、深さ約1mを測り、長さ約11mにわたって検出した。溝は南北両側から流入したと思われる土によりレンズ状の堆積が認められた。SD 1は尾根の稜線に直行するように掘削されていることから、道路に伴う掘切と考えられる。

(2) 土坑

[SK 1] (第18・25図)

SK 1はSD 1の南側2mに位置し、平面形は不整な方形を呈している。長辺2.43m、短辺1.05~1.62m、深さ0.25mを測った。

[SK 2] (第18・25図)

SK 2はSK 1の南側2mに位置し、平面形は不整な梢円形を呈している。長軸3.22m、短軸1.62m、深さ0.34mを測った。

[SK 3] (第18・25図)

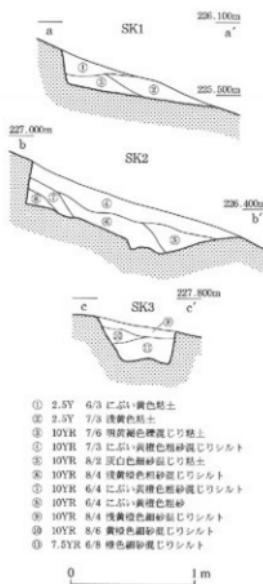
SK 3は調査区の西側中央に位置し、平面形は不整な梢円形を呈している。長軸1.36m、短軸0.68m、深さ0.3mを測った。

[SK 4] (第19図)

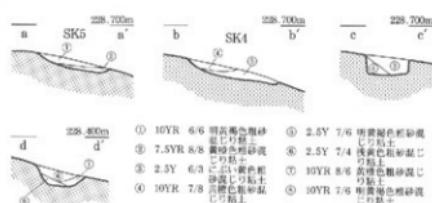
SK 4は調査区中央の畦直下で検出し、隅丸方形の平面形を呈する。長軸0.65m、短軸0.6m、深さ0.15mを測った。

[SK 5] (第19図)

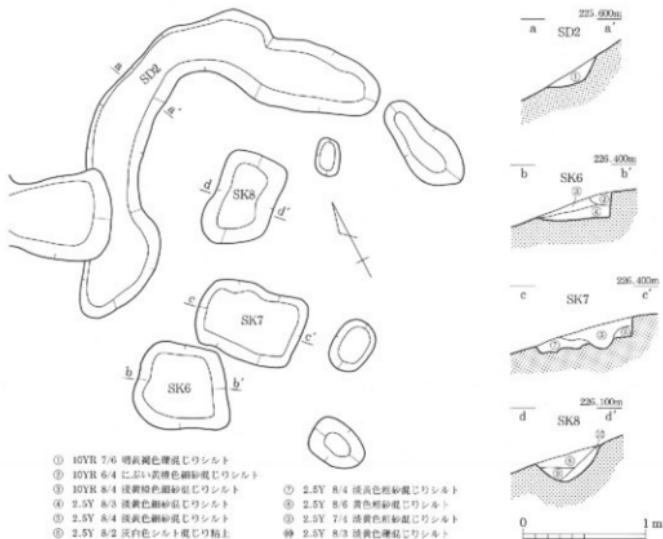
SK 5はSK 4に隣接し、隅丸方形の平面形を呈する。長軸0.8m、短軸0.55m、深さ0.1mを測った。



第18図 SK 1 ~ 3 遺構断面
実測図 (1/40)



第19図 SK 4 + 5 遺構実測図 (1/40)



第20図 S R 1 遺構実測図 (1/40)

(3) 土壙墓

[S R 1] (第20図、図版10)

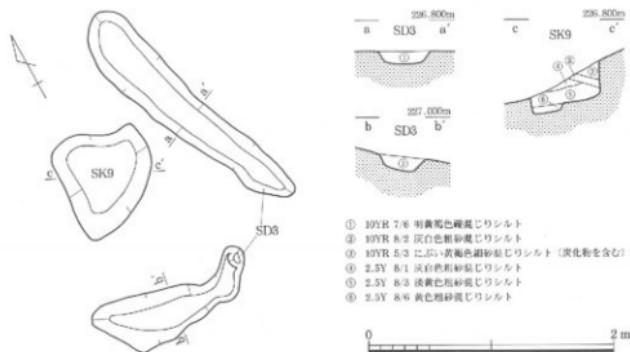
S R 1 は S D 1 の南側に位置し、SK 6、SK 7、SK 8 の 3 基の土坑とこれらの周囲を囲む S D 2 によって構成されている。各遺構の位置関係と埋土からこれらは密接な関連を有するものと考えられる。各遺構から遺物は出土しなかったものの、類例から土壙墓である可能性が高いと判断できる。また、土坑には焼土や炭化物が含まれるものがある。

S D 2 は中央部で屈曲しているが、長さ 4 m、幅 0.4~0.6 m、深さ約 0.2 m を測り、埋土は 10Y R7/6 明黄褐色疊混じりシルトである。

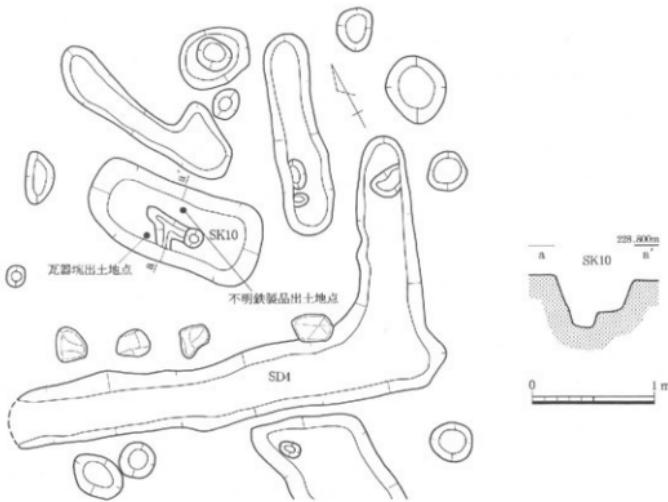
SK 6 の平面形は隅丸方形を呈しており、長辺 0.74 m、短辺 0.7 m、深さ 0.2 m を測った。平坦な底部を有する。埋土は下から ④ 2.5Y 8/3 淡黄色細砂混じりシルト、③ 10Y R8/4 淡黄褐色細砂混じりシルト、② 10Y R6/4 にぶい黄橙色細砂混じりシルトとなる。底部から肩の高さが、標高が高い北側に比べて、南側が低いのは、基盤層の流出のためと考えられる。

SK 7 の平面形は隅丸長方形を呈しており、長辺 0.86 m、短辺 0.63 m、深さ 0.2 m を測った。底部には起伏が認められた。埋土は両側から埋まつた状況を示しており、下から ⑦ 2.5Y 8/4 淡黄色粗砂混じりシルト、⑥ 2.5Y 8/2 灰白色シルト混じり粘土、⑤ 2.5Y 8/4 淡黄褐色細砂混じりシルトの 3 層であった。埋土には焼土・炭が含まれていた。

SK 8 の平面形は不整な隅丸長方形を呈しており、長辺 0.82 m、短辺 0.49 m、深さ 0.22



第21図 SR 2 遺構実測図 (1/40)



第22図 SR 3 遺構実測図 (1/40)

mを測った。底部は丸く浅く窪んでいた。埋土は⑩2.5Y8/3淡黄色疊混じりシルト、⑨2.5Y7/4淡黄色粗砂混じりシルト、⑧2.5Y8/6黄色粗砂混じりシルトの3層であった。

〔SR 2〕 (第21図、図版11)

SR 2はSR 1の南側に位置し、SK 9とその周囲を囲んでいるSD 3によって構成される。SK 9とSD 3は位置関係と埋土から密接な関連を有するものと考えられる。遺物は出土しなかったもののSR 1と同様に墓の可能性が高いと判断できる。またSK 9には焼土と炭化物が含まれていた。

SD 3は中央部が途切れているが、これは基盤層の流出によるものと考えられる。長さ

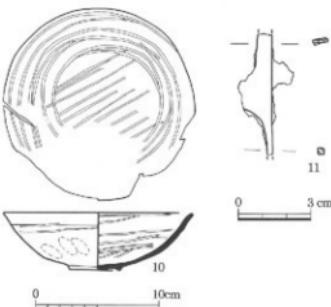
4m、幅0.3~0.4m、深さ0.1mを測った。

S K 9は不定形な平面形を呈しており、長軸0.86m、短軸0.76m、深さ0.24mを測った。埋土には炭化物が含まれていた。埋土は5層で、⑥・⑤・④はほぼ水平に堆積しており、これらの上部に堆積する③・②は西側から流入したような状況を呈していた。

[S R 3] (第22・23図、図版12・14)

S R 3は調査区の中央に位置し、S K 10の周囲をS D 4が囲んでいる。溝が土坑より標高が高い位置にある状況は他の2基と共通した特徴であり、S D 4の平面形はS D 2に類似する。S D 4は中央部で屈曲しているが、幅0.5m、長さ5.5m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で構成されていた。

S K 10の平面形は隅丸長方形を呈しており、長辺1.48m、短辺0.65m、深さ0.29mを測った。S K 10の底部は中央部がやや窪んでいることを除いて平坦である。S K 10からは瓦器塊(10)、不明鉄製品(11)が出土している。瓦器塊は和泉型瓦器塊であり、口径15.4cm、器高4.7cmであり、尾上編年でIII-3期となり、13世紀前葉のものであろう。不明鉄製品は残存長5cm、幅2.1cmを測る。両端部が欠損している。



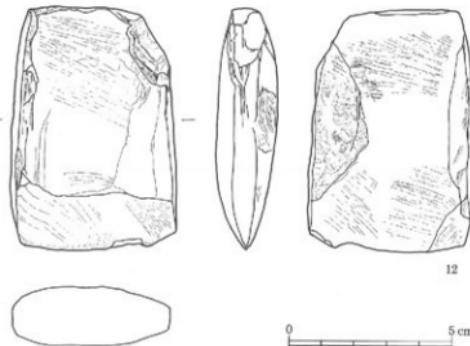
第23図 S K 10出土遺物実測図

(4) その他の遺構

これらの遺構以外に調査区の南半部では柱穴群を検出しているが、柱穴の規模や並びから判断して建物跡となり得るようなものではない。また、トレンチの北端では石列を検出している。

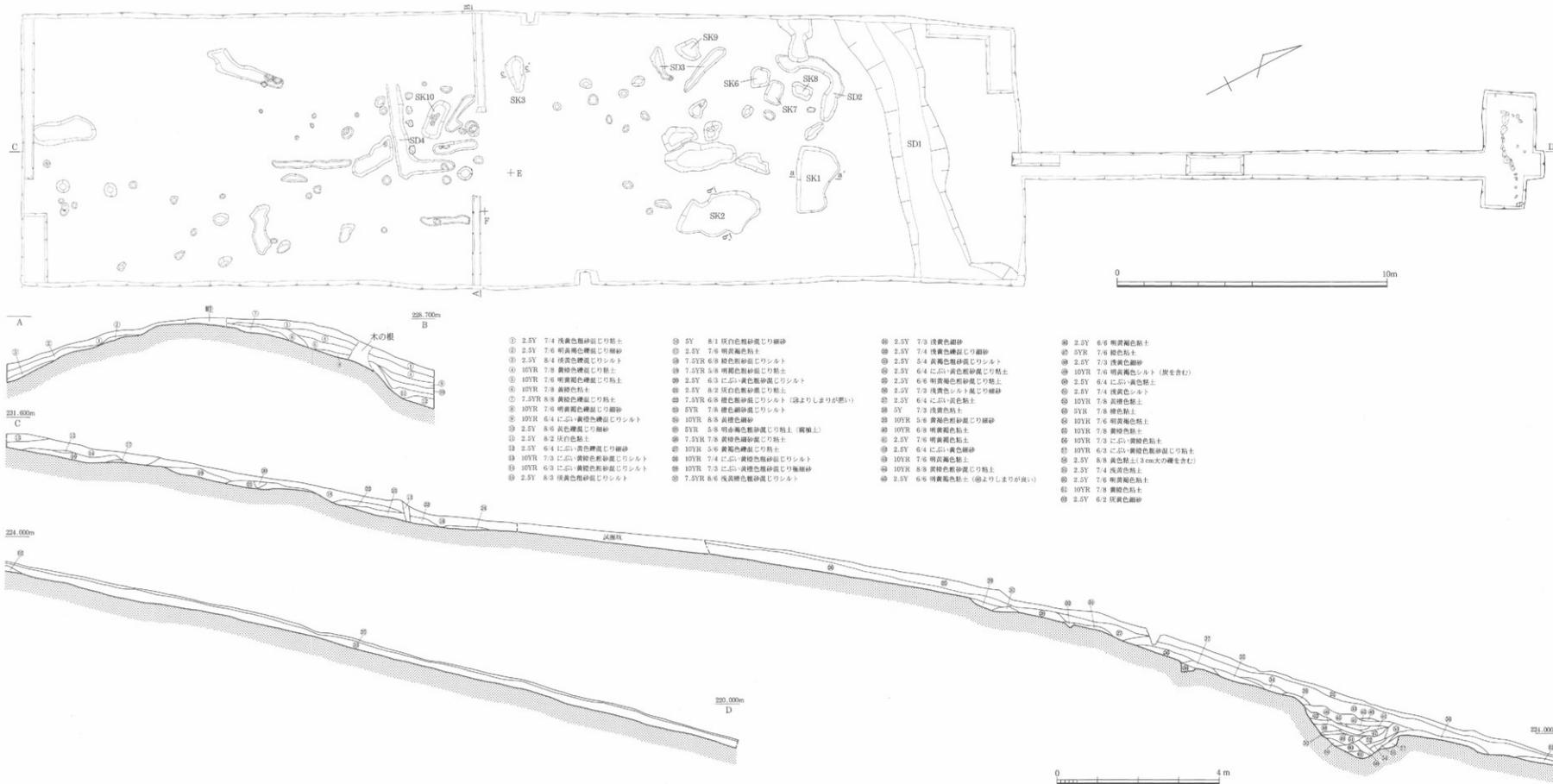
(5) 包含層

包含層出土の遺物には伊万里の碗、瀬戸の陶磁器があった。調査区の北側に拡張したトレンチからは弥生時代の扁平片刃石斧(12)が1点出土している。石斧は長さ7.5cm、幅5.1cmであった。



(第24図、図版14)

第24図 包含層出土遺物実測図



第25図 遺構配置図(1/120) 及び土層断面実測図(1/80)

第3章　まとめ

今回の地蔵寺遺跡・地蔵寺東方遺跡では中世墓と近世建物を検出できた。特に、天見地区では、千早口駅南遺跡や清水遺跡など、これまで中世の生活域に関する調査例は豊富であったが墓域に関しては、占地や形態など不明な点が多くかった。今回の調査では集落域近辺の小高い尾根が墓域として利用され、1m未満の方形の掘形を有する火葬墓が造られていることが明らかになった。また、掘形の周囲、特に斜面の標高が高い側には周溝を巡らせているものがあった点も注目される。副葬品に関してはほとんど検出されなかつたが、S R 3 からは瓦器塊と不明鉄製品が出土している。

河内長野市域における中世墓の検出例は三日市遺跡^(註1)、天野山金剛寺遺跡^(註2)などで例がある。特に三日市遺跡では、12世紀後半の土壙墓の存在が確認されており、S R 7・S R 8 からは共に貿易陶磁器である白磁のIV類碗が出土している。また、これに続く13世紀の墓域も確認されており、山の斜面地に集団的な墓が造られる状況が明らかになっている。今回検出した中世墓も13世紀のものであることから市域においてこのような墓域の変遷が認められる可能性がある。天野山金剛寺遺跡の調査では41基にのぼる土壙墓が検出されており、ほとんどの土壙墓の埋土に灰や焼土が含まれている。甕や壺・鉄器を納めたものがあり、調査者によって火葬墓と推定されている。今回の検出例とは出土品の内容に相違があるが、埋土に灰や焼土が含まれている点はよく近似している。このような例に比べると今回の調査で検出した火葬墓では遺物が乏しいことが指摘できる。また、天野山金剛寺遺跡で検出されている火葬墓の掘形の規模は2m以上の大型のものがあるものの、1m以内のものがほとんどを占め、今回の検出例とよく近似する。

(註1) 『三日市遺跡発掘調査報告書II』 三日市遺跡調査会 1988年

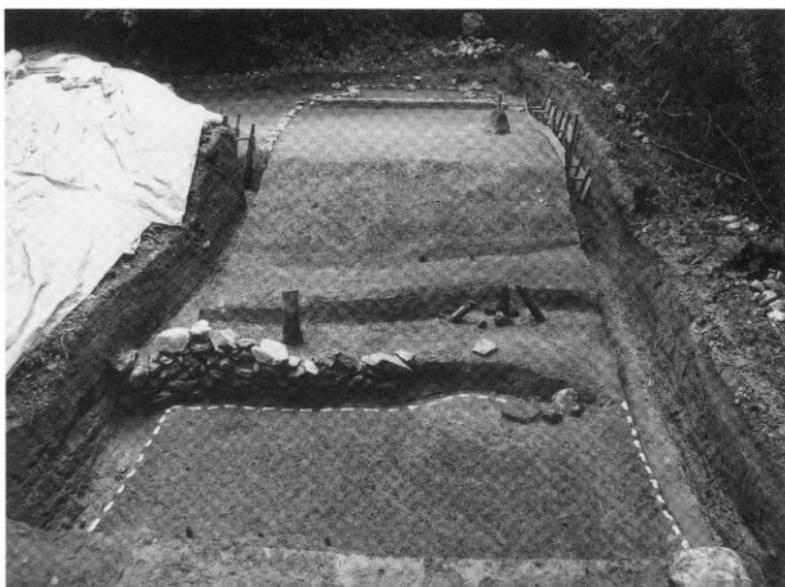
(註2) 『河内長野市文化財調査概要 天野山金剛寺 中世墓地発掘調査』 金剛寺坊跡調査会 1975年

図版

図版1 地蔵寺遺跡・地蔵寺東方遺跡



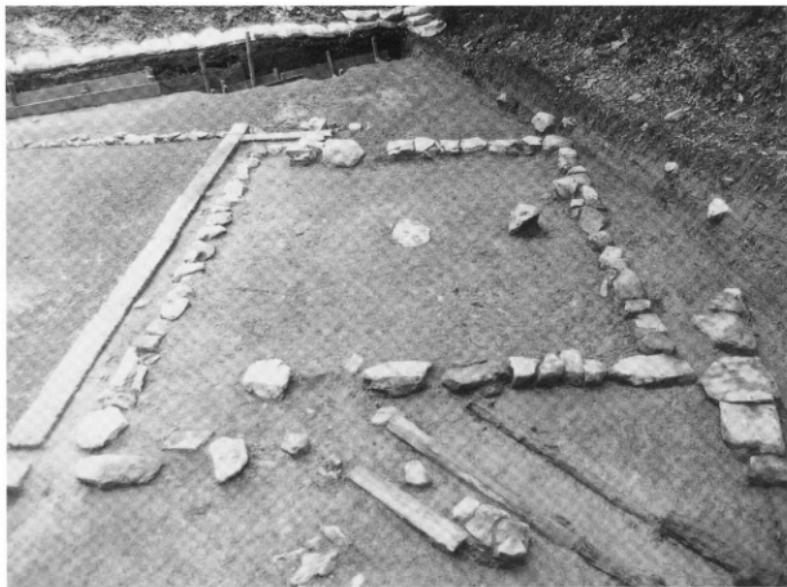
調査地遠景（上空から）



第1調査区全景（東から）



第1調査区全景（西から）



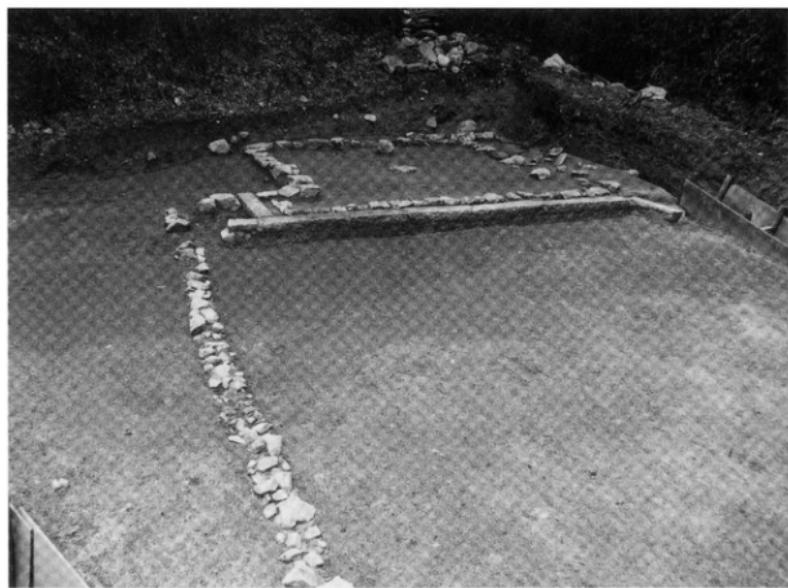
SB 1(北から)



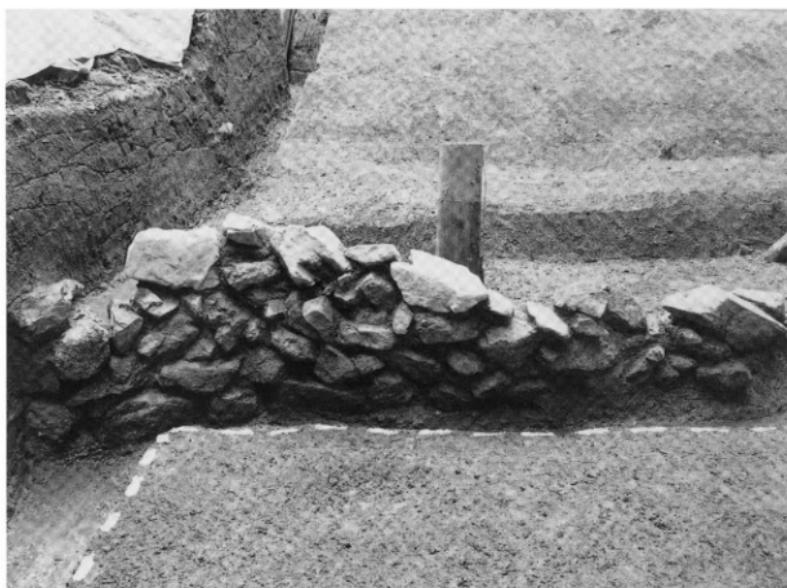
SB 1(南から)



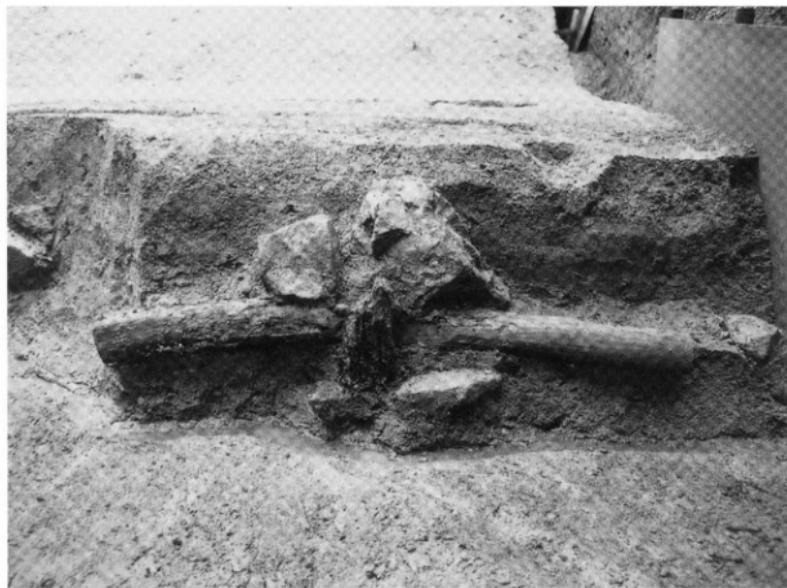
SB 1 · SD 1 (北から)



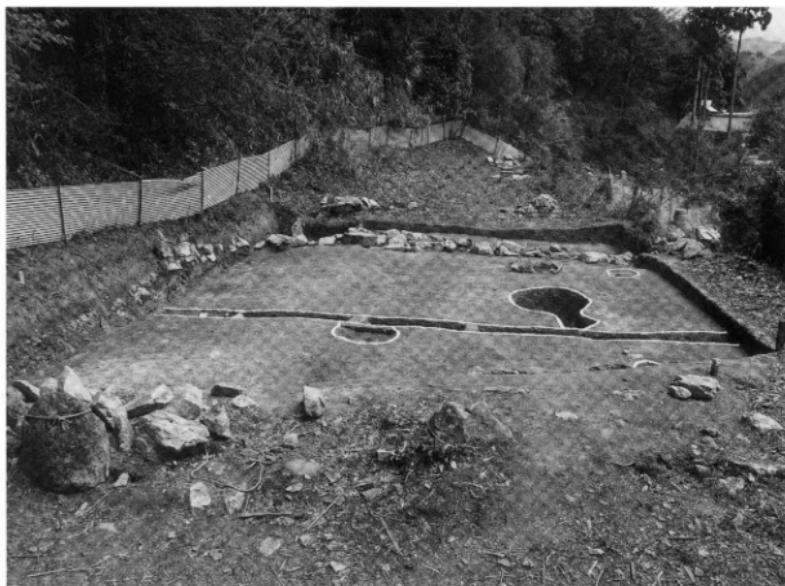
SB 1 · SW 1 (東から)



S W 2 (東から)



S W 2 裏込土中の木組み遺構 (東から)



第2調査区全景（西から）

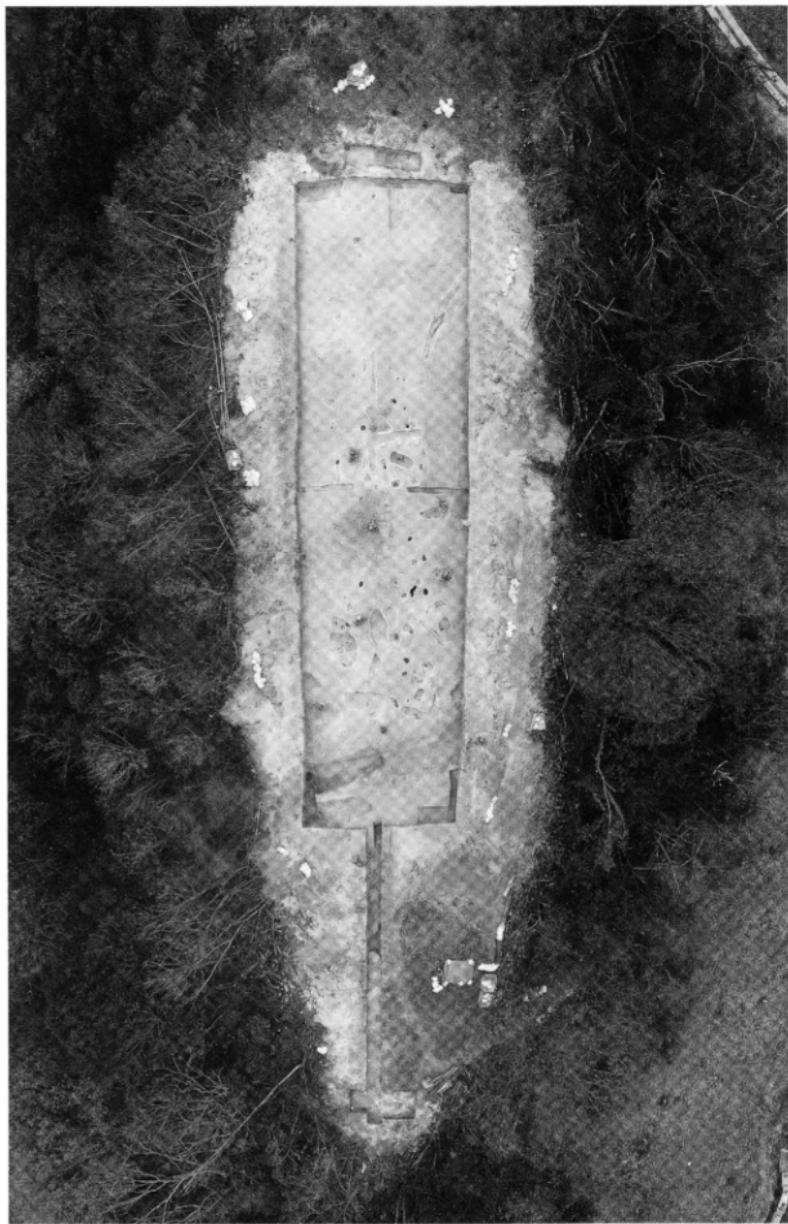


第3調査区全景（北から）

図版 7
地蔵寺東方遺跡



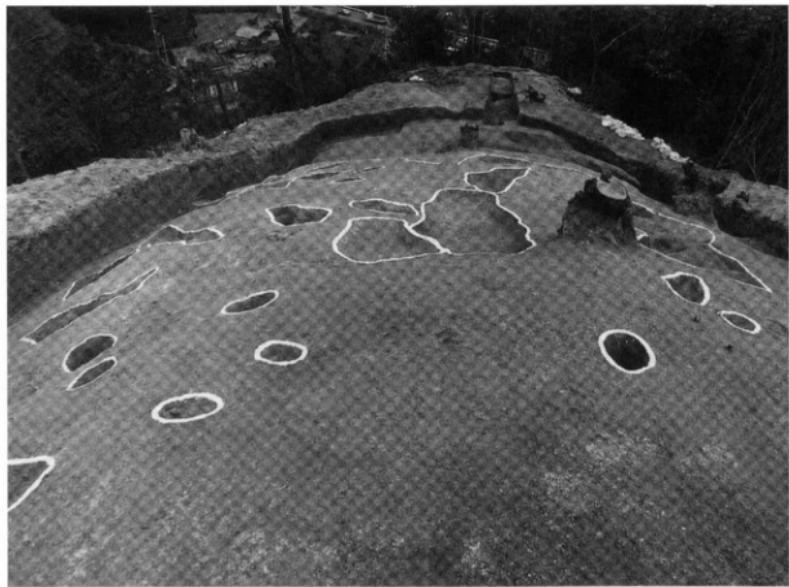
調査区遠景（上空から）



調査区全景（上空から）



調査区全景（南から）



調査区北半部（南から）



SR 1 検出状況（西から）



SR 1 完掘状況（西から）



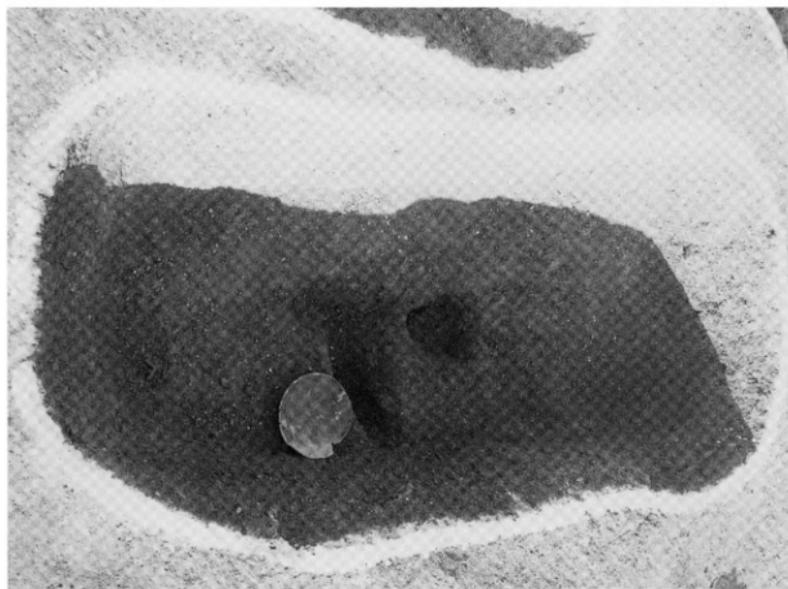
SR 2 検出状況（西から）



SR 2 完掘状況（西から）



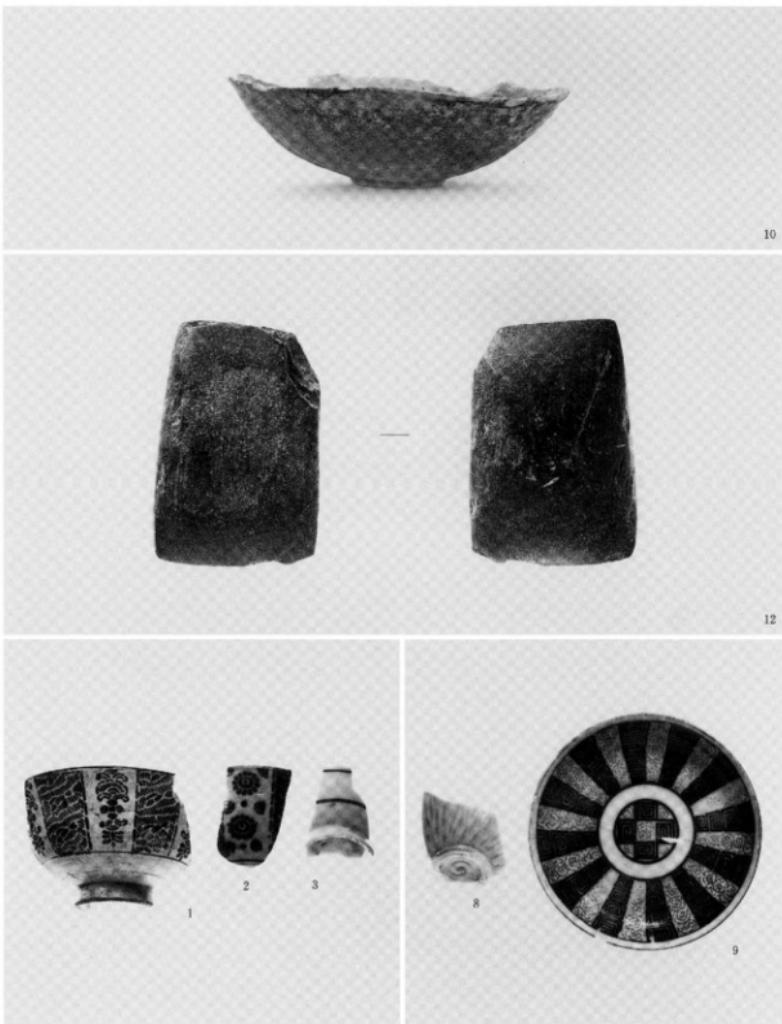
SR 3 完掘状況（北から）



SR 3 遺物出土状況（北から）



調査区北部トレンチ全景（北から）



地蔵寺遺跡 第1調査区包含層（1～3）、第2調査区包含層（8・9）
地蔵寺東方遺跡 SK10（10）、包含層（12）

報告書抄録

ふりがな	じぞうじいせき	じぞうじとうほういせき
書名	地蔵寺遺跡 地蔵寺東方遺跡	
副書名	河内長野市遺跡調査会報XXI	
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報	
シリーズ番号	XXI	
編著者名	尾谷雅彦 烏羽正剛 太田宏明	
編集機関	河内長野市遺跡調査会	
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3	TEL 0721-53-1111
発行年月日	2000年3月21日	

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
じぞうじいせき 地蔵寺遺跡	おおさかふかわらながの し 大阪府河内長野市 しもす 清水	27216	府19 河16	34° 24' 19"	135° 35' 27"	1999. 4.20 1999. 5.21	約280m ²	農道建設事業
じぞうじとうほう 地蔵寺東方 いせき 遺跡	おおさかふかわらながの し 大阪府河内長野市 しもす 清水	27216	府64 河34	34° 24' 20"	135° 35' 16"	1999. 4.20 1999. 5.20	約374m ²	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
地蔵寺遺跡	社寺	中世以降	近世礎石建物	瀬戸陶磁器	
地蔵寺東方 遺跡	墳墓	鎌倉	火葬墓	瓦器塊	

河内長野市遺跡調査会報 XIII
地蔵寺遺跡 地蔵寺東方遺跡

2000年3月21日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3

河内長野市遺跡調査会

0721-53-1111

印 刷 株中島弘文堂印刷所
